

## 甲状腺外科草子 156 哲人宰相：大平正芳余話⑬

杉野 圭三

大平正芳没後、娘婿の森田一氏（秘書、元衆議院議員）や孫娘の渡邊満子氏は著書を出版、家族ならではの面白い逸話を紹介している。



### 田中角栄との「すきやき戦争」

大平は無類の「すきやき」好きで、田中角栄を自宅でもてなす時の定番メニューだった。

大平は甘党なのですき焼きには砂糖をドッサリ入れる。一方、角栄は新潟出身で塩辛い味付けが好きで、それでは満足できず醤油を勝手にドボドボ入れる。この繰り返しで最後には佃煮のようになり食べれたものではなくなったそうだ。

新橋の料亭では心得たもので、「大平用」と「角栄用」の2種類のすきやきが用意されたとのこと。

### 田中角栄への手土産

池田内閣の閣僚人事で大蔵大臣就任を田中角栄に頼みに行くこととなった。

「大平外務大臣」、「田中大蔵大臣」の構想で、記者や他の政治家に漏れるとつぶされる危険があった。当初、大平が池田に「田中蔵相案」を持って行くと、池田は「あんな車夫馬丁の類には大蔵大臣は務まらん」と不機嫌だったという。

大平は秘書の森田一に「ちょっと田中君のところに行くからついてこい」と菓子箱に500万円を詰めさせ、二人で塀をよじ登り、こっそりと邸内に入ったとのことである。

田中角栄にとって500万円は雀の涙程度の挨拶料だったようで、寄付を頼まれると本人の希望額の10倍ぐらいをいつも気前よく出してくれたそうだ。

### 津島壽一蔵相8時間訓示事件

戦後、GHQから大蔵省ビルを接収するので72時間以内に退去せよとの指令が出た（昭和20年9月11日）。

このことに、当時の津島壽一蔵相は機嫌を損ね、山際正道事務次官、福田赳夫官房長、大平正芳秘書、宮澤喜一秘書を招集した。大臣室に最後に入った宮沢秘書の後のドアがキッチンと閉めてなかったのを津島は目にとめた。



津島壽一



山際正道



福田赳夫



宮沢喜一

「近頃の大蔵省は職員の仕事がゆるんだ。こんなことで大蔵省は敗戦日本の背骨になれるか。次官どうかね？」

それから延々と8時間もの間訓示が続いた。山際次官は直立不動で拝聴、福田、宮沢はすわったまま適当な相槌、大平は終始頭を下げていたが眠っていたらしい（福田赳夫、大平正芳回想録追想編）

### 娘の教育に対する市川房枝の質問

大平の娘芳子が「婦人公論」に「大学に行きたいと申しますと、父は、女の子は大学などに行くものではない。それよりさっさとお嫁に行くことでも考えなさい、といわれてしまいました。後略」と書いたことがある。この文章が市川房枝の目にとまった。

市川房枝（1893－1981）は1953年から1981年までの28年間参議院議員（二院クラブ）を務め、女性の権利、地位向上に尽力した名物議員である。



1979年1月31日の参議院本会議、首相の施政方針演説に対する市川房枝議員の代表質問。

総理のお嬢さんが「婦人公論」への寄稿で「父は昔から口癖のように“おなごは勉強せんでいい、可愛い女になれ、そして早くお嫁に行きなさい”と言っていた」とあります。

総理にはもうひとつ婦人問題企画推進本部長という職がありますが、その方の資格は足りない、落第と申し上げざるをえない（笑）。これに対する大平の答弁。

私が娘に対し早く嫁に行けと申したのは事実です（笑）。父親としてできるだけ早く良縁を得て身を固めてもらいたいという念願を持っておりましたので“女に学問はいらない、早く嫁に行け”という言葉は熟しない（笑）、ご批判をいただく余地が充分あると思いますけれど、父親として女の幸せを追求してもらいたいという（拍手）気持ちはお汲みいただけるのではないかと思います。

女性は男性より物事に誠実で、子どもをもうけるという手ごたえのある人生経験は男性にはできないことで、私は女性を尊敬しています（大爆笑）

この時の答弁をどうするか、秘書の森田一は頭を悩ませたが、大平は「俺が適当にやっておく」と原稿なしで行ったとのこと。

双方ともウイットに富んだ暖かい国会答弁である。

参考資料：大平正芳回想録 追想編、Wikipedia

（一甲状腺外科医の徒然なる随想）

2025年10月23日